

2021年11月28日 主日礼拝 アドヴェントⅠ 世界祈禱週間を覚えて  
説教題「賛美の衣をまとわせるため」イザヤ書 61 章 1～4 節

主任牧師 加藤 誠

**「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。」(イザヤ書 61 章 1 節)**

教会の暦では今日からアドヴェント（待降節）に入りました。そして今日から一週間、私たちは「世界バプテスト祈禱週間」を覚えて過ごします。世界に派遣されている福音宣教のための働き人を覚えて祈りを合わせるのです。

この「世界祈禱週間」は今から133年前、1888年に始まりました。そのきっかけは当時、単身で中国の奥地に派遣されていた女性宣教師ロティ・ムーンが本国のアメリカのバプテスト教会に宛てた手紙でした。「もっと宣教師を送ってください。後任の宣教師が来るまで、わたしはこの地を離れることはできません。もしわたしに千の命があったらそれをみな中国の婦人にささげます」。

彼女の熱く燃える伝道の祈りと決意に満ちた手紙を受け取った南部バプテストの婦人部（当時）は、すぐにその写しを諸教会に送りました。すると各教会から祈りと共に献金がささげられてきたのです。この時以来、毎年クリスマス前の一週間を「世界祈禱週間」として守り、「ロティ・ムーン献金」と名付けられた、宣教師たちを外国に派遣するための献金運動の取り組みが始まったのでした。

この夏、私たちは新しい礼拝堂をいただきましたけれども、今年の「世界祈禱週間」を迎えるにあたって、一つの歴史をしっかりと私たちの心に刻みたいと思っています。その歴史とは、昨年まで約70年近く使わせていただいた旧礼拝堂はアメリカの南部バプテストの兄弟姉妹たちの「ロティー・ムーン献金」によって与えられた礼拝堂であったということです。礼拝堂の建築費が当時のお金で約600万円、今の価値に換算すると億単位の金額でしょうか。その資金は誰か裕福な人がポケットからポンと出してくれたものではなく、当時の南部のバプテスト教会の信徒たち一人一人が、自分の生活の中から1ドル1ドルを取り分けて、祈りをもって神さまにささげたものです。その「熱い祈りの実り」を私たちは受け取らせていただいたのです。その旧礼拝堂の建物を今や私たちは肉眼で見ることはできなくなってしまったわけですが、そこに込められたアメリカの兄弟姉妹たちの「祈り」を私たちは決して忘れてならないし、これからも将来にわたってしっかり語り継いでいかなければならない歴史であると思います。

そのことを思う時に、「世界祈禱週間」は「日本から派遣されている宣教師の先生たちを覚えて祈る時」という前に、「世界祈禱週間」において祈られてきた私たちであることをまず思い起こし、感謝をささげる時なのです。

「世界祈禱週間」はその名の通り献金の推進ではなく「祈り」の推進が中心の運動です。そこで私たちが招かれている「祈り」とはどのような祈りなのでしょうか。

まず第一に、私たちは「神さまの祈り」に心を合わせるように招かれているということです。今朝のイザヤ書 61 章を読むと、この世界に注がれている神さまの「祈り」がひしひしと伝わってきます。神さまはこの世界で「貧しさにある人、打ち砕かれ、鎖に捕われている人、嘆いている人たち」に目を注いでおられて、その一人ひとりに「良い知らせ」を届けたいと篤く祈っておられます。打ち砕かれた心が慰めに包まれ、自由と解放、恵みが届けられ、灰に代えて冠を、嘆きに代えて喜びの香油を、そして暗い心に代えて賛美の衣をまとわせたいと神さまは心から願い祈っておられる。その神さまの篤い祈りに押し出されて、私たちの間に遣わされたのが御子、イエス・キリストです。主イエスが伝道を始められた時、ナザレの会堂で最初に読まれたのがこのイザヤ 61 章でした。主イエスはこの箇所を朗読すると「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われました。主イエスはまさにこの御言葉の実現として私たちのもとに来てくださったのです。そういう意味で「世界祈禱週間」において私たちは、この世界に注がれている「神さまの祈り」と、その祈りの実現としての「イエス・キリスト」にしっかり心を合わせて祈るように招かれているのです。

二つ目に「世界祈禱週間」に招かれている「祈り」。それは「応答の祈り」です。イエス・キリストという大きな愛の恵みを受け取った一人ひとりが、今、自分にできる「応答」をささげていく「祈り」。西南の神学部の時、ギャロット先生という宣教師の先生の言葉が心に焼き付いています。「わかっただけのイエスさまに、わかっただけの自分をささげなさい」。今日この世界に注がれている神さまの確かで真実な愛を、主イエスは私たちに届けてくださった。その確かで真実な愛に応えて、今の自分にできる精一杯の応答をささげていく。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」。主イエスからいただいた愛と慰めと励ましを隣り人と具体的に分かち合うことで、主イエスの働きに参加させていただく。今から約 70 年前、この「世界祈禱週間」の「祈り」によってレニー・サンダーソン宣教師（大谷レニー先生）の献身が起こされ、先生は日本に派遣されました。「世界祈禱週間」の「祈り」がレニー先生に「主の霊」を注いで、「主の恵みを告げ知らせる器」としたのです。

「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために」「嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために」（イザヤ 61・1、3）。

レニー先生はまさにこのイザヤの御言葉のように「賛美の衣をまとわせる働き」を生かされました。私たちもこの「良い知らせを伝える祈り」に共に加わっていきたいのです。今年の「世界祈禱週間」、神さまの「祈り」にしっかりと心を合わせて、今のわたしにできる精一杯の「応答の祈り」をささげていきましょう。